

2. 現状と課題（2013年度前期アンケートの結果から）

基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて

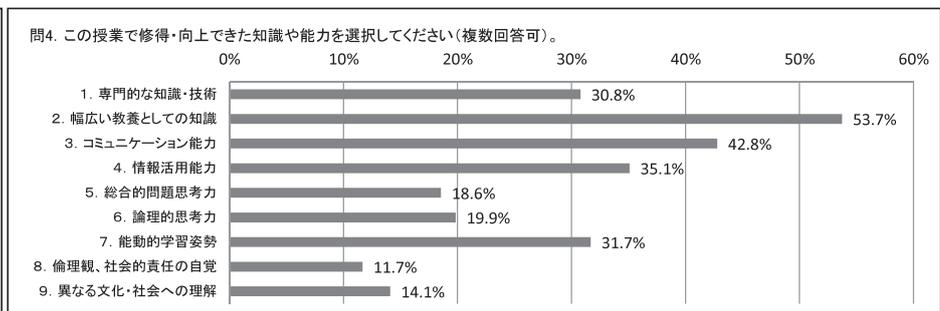
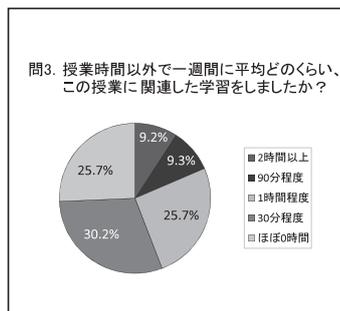
基礎ゼミナール部会長
都市教養学部法学系准教授
前田 健太郎

〈実施期間〉 平成25年7月9日(火)～平成25年7月22日(月)
 〈履修登録者数〉 1,649人 〈回答者数〉 1,293人 〈回収率〉 78.4%
 〈授業科目数〉 80クラス 〈実施科目数〉 68クラス 〈実施率〉 85.0%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.96	0.99		34.4%	37.4%	20.3%	5.4%	2.4%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	4.05	0.87		31.6%	48.2%	15.2%	3.4%	1.6%
問8 この授業を通じて、問題発見と、その解決に向けた自発的な取り組み姿勢の重要性を認識した。	4.15	0.82		36.6%	45.4%	15.3%	1.6%	1.2%
問9 この授業を通じて、議論や発表などの自己表現能力を向上させることができた。	4.07	0.81		31.0%	50.2%	14.9%	3.0%	1.0%
問10 グループでの調査や討論を通じて、他所属の学生とも良好な人間関係を形成することができた。	4.06	1.00		38.6%	39.4%	14.7%	4.0%	3.4%

データ数 = 1,293

■ 5. そう思う ■ 4. ややそう思う ■ 3. どちらでもない ■ 2. あまりそう思わない ■ 1. そう思わない



【はじめに】

基礎ゼミナールは、討論、レポート作成、口頭発表、調査などを通して、より積極的な学習姿勢と課題発見能力や問題解決能力を身に付けることを目的とした新生対象の必修科目である。本年度は、1649名の履修登録者に対して80クラスが開講された。ここでは、「授業改善アンケート」の中でも、主に学生用アンケートの結果の概要を報告する。

【調査対象と回収率】

学生用アンケートの調査対象は、各ゼミナールの受講者である。全80クラス中、68クラスでアンケート

を実施し（実施率85.0%）、全履修登録者1649人中、1293人から回答を得た（回収率78.4%）。昨年度の実績と比較すると、実施率は同じ水準（85.0%）を維持したのに対して、回収率（79.5%）はやや低下した。

【質問項目】

マークシートによる質問の中でも、問1～4は全体に共通する項目である。これに対して、問8～10は基礎ゼミナールについての個別の質問項目である。ここでは、後者の質問項目について簡単に述べる。問8は、課題発見能力と問題解決能力の向上という授業目的に関するものである。問9は、自己表現能力の向上とい

う授業目的に関するものである。問10は、豊かな人間関係の形成という授業目的に関するものである。これらを質問項目が設定されたのは、基礎ゼミナールの目標と密接に関わるという観点からである。

【アンケート結果】

(1) 共通事項

問1の回答の平均値は3.96であり、基礎ゼミナールのシラバスはかなりの程度まで受講者による授業の選択と学習に役立っていることが分かる。また、問2の回答の平均値は4.05であることから、受講者の主観的な理解度もかなり高い水準にあることが分かる。これらの質問項目は今年度新たに設定されたものであるため、経年比較はできないものの、5段階中の「1」と「2」の回答者の割合が極めて少ないことを考えれば、基礎ゼミに対する受講者の満足度は概ね高い。逆に言えば、これは授業担当教員の努力の賜物である。

授業時間外の学習時間に関する質問項目である問3に対する回答を見ると、「ほぼ0時間」と回答した25.7%の受講者を除けば、受講者の多くは一定の時間を基礎ゼミナールのための学習に割いている。受講者間の学習時間の違いは、個々の受講者の学習意欲の有無と同時に、ゼミナール間の授業負担の格差にも起因するものと思われる。

授業で習得した知識・能力の内容に関する問4に対する回答を見ると、多くの受講者は教養としての知識やコミュニケーション能力を習得できた内容として挙げた。これに対して、総合的問題思考力や論理的思考力、倫理観・社会的責任の自覚、異なる文化・社会への理解などの項目を挙げた受講者の割合は少ない。こうした傾向は、ゼミナールの内容に応じて習得できる知識が異なることを意味していると考えられる。

(2) 個別事項

問8～10の質問項目の平均値はいずれも4以上であり、その数字は極めて高い水準にある。従来との経年比較の可能な問8と問9を見ると、2013年度のアンケート結果は過去の数年と比べても飛びぬけて数字が高いことが分かる。この変化は、授業内容の改善だけでなく、アンケートの題名や質問項目形式の変更によって生じた可能性も否定できない。しかし、こうした要素を考慮したとしても、少なくとも学生が目から見て、基礎ゼミナールの授業目的は基本的に達成され

ていることが伺われる。

【自由記述欄】

以上のマークシートのアンケート結果を踏まえた上で、自由記述欄（問5～7）の内容について簡単に述べる。授業についての教員の工夫や良かった点に関する問5に対しては、グループワークやプレゼンテーションの経験、レポート作成方法の指導などを挙げた受講者が多かった。これに対して、授業についての改善要望や改善案に関する問6では、発表のスケジュールが明確でないケースや、学生同士の議論よりも教員への質問が行われることの多かったケース、パソコンの起動に時間のかかったケースに関して、授業内容の改善を求める声があったほか、より負担の軽いゼミナールとの負担の均衡を求める意見が寄せられた。その他のコメントを集めた問7には特に明確な傾向は見られなかったものの、ゼミナールの内容に関する多くの肯定的な意見が書き込まれた。

【教員による授業改善の試み】

以上の学生用アンケートと並行して、授業担当教員を対象とするアンケート（自由記述）も行われた。内容は、学生の要望を参考とする授業内容の変更（問1）、その効果（問2）、および学生の要望に対して授業内容を変更しなかった場合の理由の説明（問3）に関するものである。その詳細をここで紹介することはできないが、プレゼンテーションの回数を増やす、学生同士の議論の時間を増やす、小テストを行うなど、各教員が様々な工夫を行っていることが明らかになった。

【おわりに】

以上で見てきたように、基礎ゼミナールに対する受講者の満足度は高く、その授業目的はおおむね達成できていると思われる。今後は、ゼミナール間の負担の格差や、教員ごとの成績評価基準の違いに伴って生じる受講者の不公平感に対応することが必要なのではないかとと思われる。

情報リテラシー実践 I の授業アンケートの結果

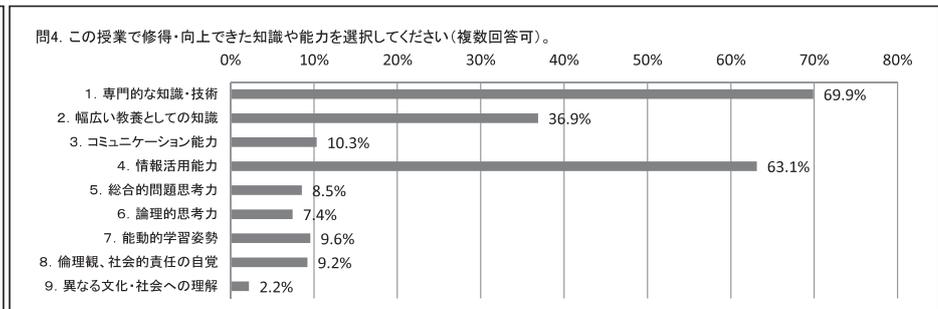
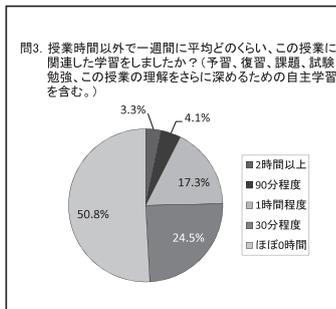
情報教育検討部会部会長
 大学教育センター教授
 永井 正洋

〈実施期間〉 平成25年7月9日(火)～平成25年7月22日(月)
 〈履修登録者数〉 1,643人 〈回答者数〉 1,216人 〈回収率〉 74.0%
 〈授業科目数〉 38クラス 〈実施科目数〉 35クラス 〈実施率〉 92.1%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.58	1.14		24.7%	28.8%	32.7%	6.8%	6.9%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.77	0.95	18.7%		54.6%	15.0%	8.5%	3.2%
問8 私はこの授業を受講して満足した。	3.89	1.01	30.3%		41.9%	17.9%	6.8%	3.1%
問9 授業全体を振り返って、この授業はあなたにとって難しかった。	3.37	1.09	15.6%	32.9%	30.2%	15.6%		5.7%
問10 チューターは学生の質問・意見に対して適切に対応した。	4.08	0.99	42.4%	31.7%	20.3%			3.1% 2.6%

データ数=1,216

■5. そう思う ■4. ややそう思う ■3. どちらでもない ■2. あまりそう思わない ■1. そう思わない



【はじめに】

本稿では、2013年度の前期末に行った、FD委員会実施の情報リテラシー実践 I に関する授業改善アンケート(学生用)の結果と、情報教育検討部会が行った授業評価アンケートの結果について報告する。

本題の前にまず、学生が入学時に既に獲得している情報リテラシーの実態について述べたい。情報教育検討部会では、新入生の高等学校までの情報リテラシーを測定するために、平成18年度よりレディネス調査

を毎年、行ってきた。この調査は主観調査(意識調査)と客観調査(テスト)からなるが、主観調査では、年々、学生の“できる”という意識の向上は見られるものの、多くの項目で肯定的意識が50%を超えておらず、未だあまり自信のない状態にあるといえる。更に、客観テストの結果は、他大学の平均と比べ若干低い得点を示しており、本学入学時には情報リテラシーが必ずしも十分に備わっているとはいえない。

以上のことと、情報リテラシー実践 I は、基礎的な

情報活用の実践力を育成する科目として、支持されていることから本学設立以来、継続して開講している。これに加え、高度情報化社会の進展と各部局からの要請があり、より専門性を高めた授業として、情報リテラシー実践 I A（表計算ソフトを利用した統計処理）という科目も開設した。現在は、これら 2 科目のうち 1 科目を選択必修として、学部・系・コースで選択している。

【方法】

まず、学生用アンケートの質問項目だが、共通項目が問 1～4、個別質問項目が問 8～10 となっている。個別質問項目については、情報教育検討部会にて設定される。

次に回答方法に関しては、6年に渡り eラーニングシステムを用いてアンケートを実施している。学生用アンケートでのシステム利用のクラスの割合は 2008年 89.7%、2009年～2011年 97.3%、そして 2012年からは 100% となっており、現在、全てのクラスで利用されている。

【結果と考察】

問 1～10 は、FD 委員会が実施した授業改善アンケートの結果である。問 8（満足度）からは、72.2%の学生が受講して満足と感じていることが分かる。また、問 9（難易度）に関しては、現在の学習内容を 21.3%の学生が容易だと思うのに対して、48.5%の学生が難しいと思っており、例えば、情報リテラシー実践 I の学習内容をより専門的・応用的なものとする場合は、精査が必要なことを示唆している。次に、問 3（授業外学習時間）からは、授業以外での学習時間について、30 分未満の学生が 75.3% いることが示されており、本科目の抱える問題といえよう。しかし、前年度が 80.8% であったことを考えると、若干であるが改善していることが分かる。最後に、問 4（知識・能力獲得）を見ると、特に「専門的な知識・技術」、「情報活用能力」を修得・向上できたと回答していることが分かるが、現在、情報倫理の育成に関して要請の多いことを勘案すると、「8. 倫理観、社会的責任の自覚」の項目を今後、伸ばしていく必要があると考えられる。

続いて、情報教育検討部会による授業評価アンケートの結果（図 1）に関して報告する。これら 4 つの質

問項目からは、学生の 77.4% が、情報リテラシーが身についたと回答すると共に、76.6% が意欲的・積極的に授業に取り組んでいることや、70% 以上の学生が教員の説明を分かりやすいと思い、また、その対応に満足していることが分かる。

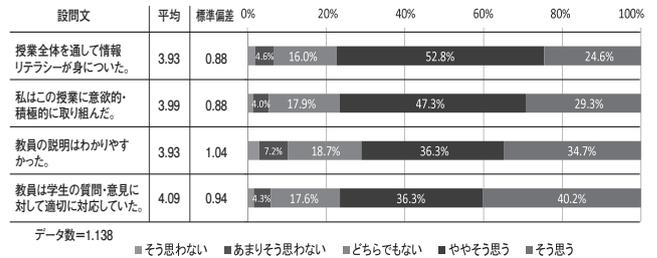


図 1：授業評価アンケート（情報教育検討部会版）

以上、まとめると、概ね学生は意欲的に授業に取り組み、教員の説明や対応も評価すると共に、情報リテラシーが身についたと認識している。更に、その結果、全般的に授業を受講して満足していたことが示されたといえる。このような傾向は、ここ 5 年以上続いており、情報リテラシー実践 I のカリキュラムが、継続かつ安定して学習者に評価及び支持されていると考えられる。

反面、課題となる側面としては、授業内容をどちらかというとなりに感じていて多くの学生が多くの授業外での学習時間が不足していることがあげられる。特に学習時間が十分でない点に関しては、単位の実質化の観点からも問題となる。よって、今後、主体的な学習を促すような eラーニングコンテンツの開発を行い授業前の予習として位置づけ、反転授業を構成するなどして改善に努めたい。

さて、これまで今回の授業評価について述べてきたが、これらは 5 件法によるアンケートのデータを量的に分析した結果に基づいている。しかし、今回から授業評価を授業改善アンケートとして実施した目玉である学生の自由記述の結果は反映されていない。自由記述に関しては、より具体的な学習者の声として貴重ではあるものの、ともすれば実施したままになりがちであり、それをどのように生かすかが難しい。今後、質的な観点からの分析の手続きを検討していく必要がある。

実践英語教育

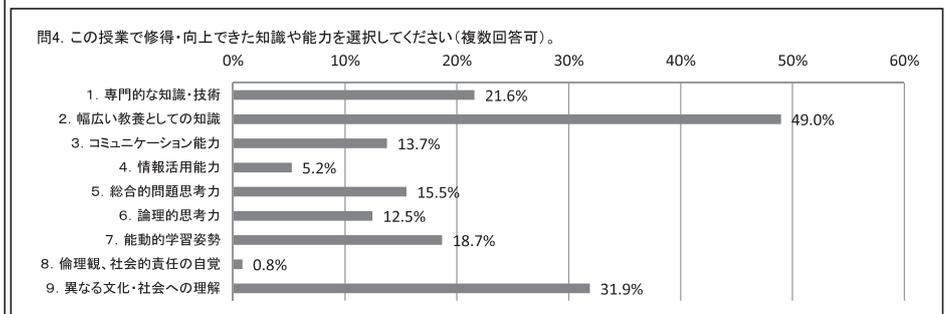
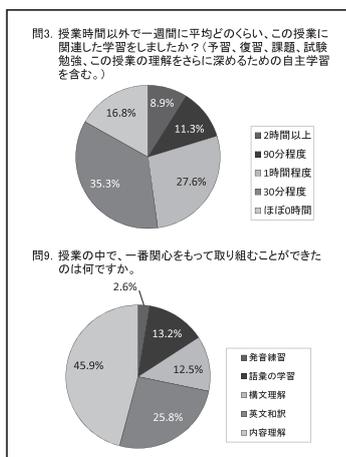
授業改善の検討とこれからの課題

英語教育分科会座長
都市教養学部人文・社会系教授
萩原 裕子

〈実施期間〉 平成25年7月9日(火)～平成25年7月22日(月)
 〈履修登録者数〉 1,764人 〈回答者数〉 1,412人 〈回収率〉 80.0%
 〈授業科目数〉 95クラス 〈実施科目数〉 88クラス 〈実施率〉 92.6%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.36	1.06	14.9%	29.7%	38.7%	10.1%	6.6%	
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.78	0.92	19.4%	51.1%	19.6%	7.6%	2.3%	
問8 今年度の統一教科書 Inside Reading 3の難易度はどうでしたか。	2.55	0.80	1.6%	4.5%	51.8%	31.4%	10.7%	
問10 この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか。	3.68	1.05	20.9%	45.3%	19.9%	9.0%	4.9%	

データ数=1,412



【はじめに】

2013年度から、本学の英語教育は新たなカリキュラムを導入した。各学部学系に、従来通り統一教科書を使用するBレベルクラスに加えて、新たにAレベルクラス(約8名)とCレベルクラス(約10名)を設定し、それぞれのレベルに適した教材を用いて、少人数でのきめ細かい指導を行っている。また、これらのレベルに学生を振り分けるためのクラス編成テストも新たにTOEICを導入した。

【個別質問事項について】

問8 統一教科書 Inside Reading 3 は、アカデミックな語彙の習得に力点を置いた教科書で、建築、都市計画、芸術、健康、科学技術、脳科学、経営、地理など多種多様な内容を扱っている。学生の多岐にわたる興味に対応できるようになっている。難易度についての質問では、昨年度の教科書が易しいという評価だったので今年度はさらに慎重に選択した。その結果、「易しい」1.6%、「やや易しい」4.5%、「ちょうど良い」51.8%、「やや難しい」31.4%、「難しい」10.7%であった。約半数

の学生が適切と評価している一方、「やや難しい」「難しい」を合わせると、一昨年度 22.4%、昨年度 4.9% に対して、今年度は 42.1% であった。5段階評価（5：易しい、1：難しい）の平均値は、2008年以降今年度まで、2.78、3.28、3.14、2.93、3.53、2.55と推移しており、2008年に統一教科書が導入されて以降、最も難易度が高かった教科書ということになる。ただし、今年度は統一教科書を使用しないAレベルのクラスを別に設けたため、統計上Bレベルの学生のみの結果であり、（Aレベルの学生にとって難易度は低いと思われる教科書かもしれないので）、レベル別の二次分析をするとより詳細な内容が明らかになるものと思われる。自由記述からは、「内容が難しいのに授業のスピードが速い」という一方、「丁寧に説明してくれたので分かりやすかった」「満足した」という内容のコメントも多かった。アカデミックな語彙や洗練された表現を身につけることは、2年次以降に学ぶ専門分野の基盤となるものであり、概ね好評だったと言えよう。

問9の「授業の中で一番関心をもって取り組むことができたのは何か」という問いに対しては、「内容理解」45.9%、「英文和訳」25.8%、「語彙学習」13.2%、「構文理解」12.5%と、ほぼ例年通りであった。

問10は「この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか。」というもので、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると66.2%となっている。5段階評価（5：そう思う、1：そう思わない）の平均値は、2008年以降今年度まで、3.19、3.14、3.28、3.41、3.31、3.68と推移しており、今年度は最も高い評価を得た。学生のニーズに合わせた適切でよりきめ細かな指導が学生も役に立つと実感したものと思われる。今回の結果は全レベルの学生を対象とした分析なので、AレベルとCレベルで少人数による指導を行った効果であるのか、または従来のBレベルの改善によるものか、またはその両方かは不明で、レベル別の二次分析の結果を待たなければならないが、いずれにせよ良い傾向と言えよう。

【共通の質問事項について】

問1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習する上で役立つ内容だったか。」という問いに対して、「あまり思わない」「そう思わない」を合わせて16.7%で全学生の約1/6なので、概ね好意的な評価を得てい

ると言えよう。

問2「授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。」という問いに対して、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると70.5%となっており、大半の学生が授業を理解している。さらに踏み込んで文法、語彙、内容理解などの細かい項目での理解については、自由記述での記載があるが、全体傾向を見るためには、次年度は個別質問欄で細項目毎に理解度を質問しても良いかも知れない。

問3は「授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか。」との質問である。「1時間程度」以下との回答が2011年度84%、2012年度87%に対して、今年度は79.7%と僅かながら減少している。「90分程度」以上は20.2%である。この結果も、レベルによって異なる可能性があるため一概には言えないが、Bレベルでは統一教科書は難易度が高いという評価があるにもかかわらず、「ほぼ0時間」が16.8%ということは、学習内容以前の勉強への姿勢の問題として大いに憂慮すべきことである。いかにして教室外学習を促すかは今後の大きな課題である。

問4「この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください（複数回答可）」に対しては、「幅広い教養としての知識」が身についたと考える学生が49%、「異なる文化・社会への理解」が31.9%と多い。この結果は、実践英語科目の目標である「社会で求められる実践的な英語力を修得する」ことが、ある程度達成されたと見なされ、グローバル社会における教養人としての知識や能力が向上できたと考える学生が多いと捉えることができる。

【今後の課題と展望】

新たなカリキュラムによる授業での前期が終了した時点でのアンケートなので、今回の結果のみでは、全体像は評価できないが、概ね良い方向に向かっていると言えよう。アンケート項目以外のことになるが、学生から、習熟度別クラス編成テストをTOEICにしたため、「自身の実力をより客観的に把握できるのがよい」という感想があった。また、統一試験をなくしたため試験は各教員の裁量に任されたので、「個別の対応ができて良かった」という教員もいた。今後は、新たなカリキュラムの方針に従って、さらに充実した授業を展開することが何より求められる。

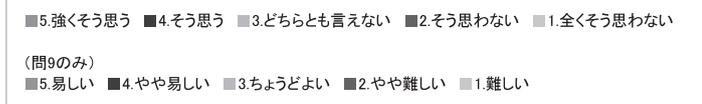
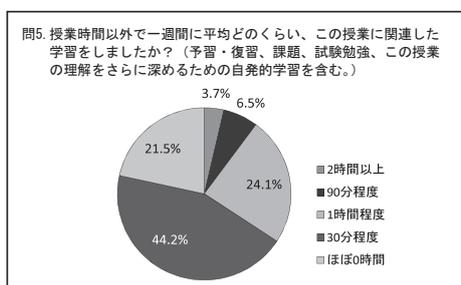
未修言語の授業アンケートについて

言語科目部会長
都市教養学部人文・社会系准教授
荒木 典子

〈実施期間〉 平成25年1月4日(金)～平成25年1月21日(月)
 〈履修登録者数〉 2,237人 〈回収数〉 1,422 〈回収率〉 63.6%
 〈授業数〉 114クラス 〈回収数〉 100 〈回収率〉 87.7%

No.	設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。	3.66	0.94	17.8%	44.1%	26.7%	9.4%	2.0%	
2	授業の目的を意識しながら学習することができた。	3.72	0.92	17.8%	47.8%	24.9%	7.2%	2.3%	
3	教員の説明はわかりやすかった。	4.00	0.96	33.6%	42.9%	15.8%	5.3%	2.3%	
4	教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。	4.07	0.88	35.0%	43.7%	17.0%	2.6%	1.8%	
6	成績評価方法について十分な説明があった。	3.62	0.97	19.0%	37.6%	31.9%	9.4%	2.1%	
7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。	3.43	0.90	10.1%	38.2%	39.4%	9.4%	2.9%	
8	私はこの授業を受講して満足した。	3.84	0.99	26.4%	43.6%	20.8%	6.1%	3.2%	
9	今年度の教科書の難易度はどうでしたか。	2.75	0.74	2.2%	5.1%	64.4%	21.9%	6.4%	
10	この授業は、今後のあなたの言語学習に資するところがあった。	3.79	0.95	23.0%	44.7%	23.5%	6.2%	2.6%	

データ数=1,422



※未修言語のアンケートは後期のみ実施しているため、2012年度後期の集計結果に基づき考察しています。

【はじめに】

大学入学後に初めて学ぶ言語科目のことを本学では未修言語科目と呼んでいる。一般的に英語以外の言語科目は「第二外国語」と呼ばれることが多いが、本来、

言語に優劣の差はないはずであり、かつ、サブ、おまけといったニュアンスを付すことを避けたいというまいネーミングである。未修言語科目には「第二群」（独・仏・中・朝）と「第三群」（露・西・伊・アラビア・ギリシャ・

ラテン)がある。言語によって細かい事情は異なるが、いずれも資格取得や就職を視野に入れた実用的な語学力の獲得と、異文化への理解を学習の目的としている。なお、未修言語科目についてアンケートが実施されたのは今回が初めてで、第二群の初級(〇〇語Ⅰ)についてのみ行われた。

【個別の質問項目】

「学生による授業評価」(SE)における項目のうち、問9、10は未修言語向けの個別質問項目である。問9は、初めての言語を学ぶ上でどんな教材で学ぶか、教材が自分に合っているかどうかが非常に重要であるため、また言語によっては提供教室所属の教員が教科書を編纂しているため反応を知るために設けた。問10は、言語の習得は一年では到底終わらないという点を踏まえ、受講生が今後も学習を続けられるきっかけの一年であったかどうかを問うために設けた。

問9「教科書の難易度」については、64.4%が「ちょうどよい」と答えてはいるが、教科書の選定が各教室或いは各担当教員に任されていることを踏まえると、もう少しきめ細かな聞き方をすべきだったかもしれない。自由記述には、どの科目も大なり小なり教科書への意見がつつられており、教材の重要性を再認識する結果となった。

問10は「5.強くそう思う」「4.そう思う」の合計が67.7%でまずまずの結果である。

【共通の質問項目の評価結果】

問1～4について、いずれの質問項目に対しても、「5.強くそう思う」「4.そう思う」の合計が60%を超えているのはまずまず良好と言えよう。問1と問2は学生自身の内省及び自己評価、問3と問4は教員への評価である。平均値を見ると教員に対する評価よりも自己評価の方が低いのは、受講生が受け身になっている傾向を表しているのかもしれない。

問5は、最も多かったのが「週に30分程度」で心細い。自宅学習を習慣づける工夫が必要である。

問6、7は「5.強くそう思う」「4.そう思う」の合計が60%を切ってしまうが、データが1年分しかない現状だけでは理由は不明で、経年変化を見た方がよいだろう。

問8は平均値3.84、「5.強くそう思う」「4.そう思う」の合計が70%と良好である。

【集計結果の経年変化】

今回が初めてのアンケートなのでなし。

【全体的な傾向、今後の課題】

集計結果及び学生・教員の意見を踏まえ、全体的な傾向と、今後、対応・改善が必要だと思われる点について述べる。

教員に対しては、以下の質問項目に対して自由に記述してもらった。

- ①この授業を行っていくうえで解決すべき課題があれば具体的にお書きください。
- ②この授業で、教育効果を高めるために先生が行われている方法・工夫等がありましたらお書きください。
- ③去年の「学生による授業評価」を受けて、取り組まれた改善事項がありましたら、具体的にお書きください。

このうち③は、今回が初めてのアンケートであったため対象外とする。多く見られたのは空調やAV機器など設備・環境に対する意見である。空調については学生の自由記述でも多く見られた。AV機器を用いた映像・音声教材の活用については、学生の記述を見てもおおむね好評で、設備を整えることはやはり必須と思われる。学生の自由記述で設備・環境に対するもの以外では、もっと発音の練習がしたかった、文法にじっくり取り組みたかった、といった具体的な希望が散見された。一人の教員がすべての意見に答えることはできないが、こまめに意見を聴き、学生の意欲を買いたいものである。

今回のアンケート結果を見ると、受講者の学習意欲や授業に対する満足度は高く、今後学習を継続していくための好ましいスタートが切れたと考えられる。未修言語科目は現在、学部・系により必修か選択か、選択の場合の推奨の度合いが異なっているが、少なくとも履修した学生の多くにとって大変有益な時間であったと言える。教材や授業方法などには正解はないが、教員が積極的に学生とコミュニケーションを取り、その時々における最善の方法を模索しながら、より多くの学生に喜んでもらいたい。

理系共通基礎科目の授業改善アンケート結果について

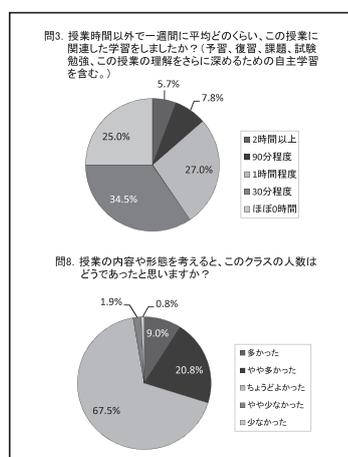
その現状とアンケートの活用方法

理工学系 FD 委員会委員長
都市教養学部理工学系生命科学コース准教授
林 文男

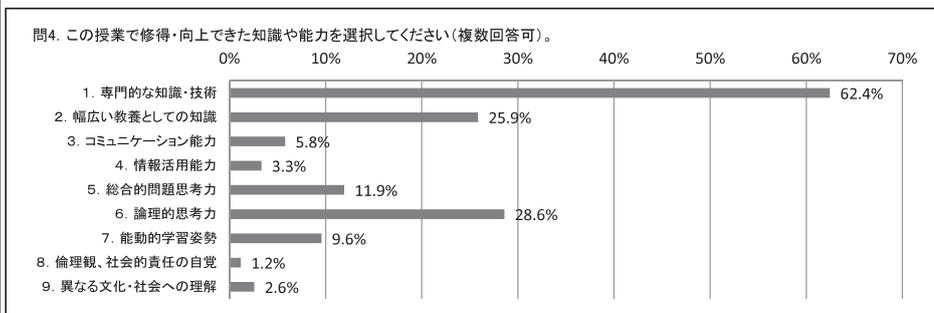
〈実施期間〉 平成25年7月9日(火)～平成25年7月22日(月)
 〈履修登録者数〉 4,811人 〈回答者数〉 3,260人 〈回収率〉 67.8%
 〈授業科目数〉 67クラス 〈実施科目数〉 61クラス 〈実施率〉 91.0%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.40	1.06	15.8%	30.3%	38.1%	9.2%	6.5%	
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.18	1.15	10.1%	35.9%	26.5%	17.3%	10.3%	
問9 快適な環境下でこの授業を受けることができた。	3.22	1.09	13.2%	26.8%	35.5%	17.7%	6.8%	
問10 この授業テーマは自分の関心にあっていた。	3.32	1.05	13.3%	30.4%	37.6%	12.4%	6.2%	

データ数=3,260



■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまりそう思わない ■1.そう思わない



【理系共通基礎科目の目的・目標】

前年度までは理工系共通基礎科目として取り扱われてきたものが、本年度からは理系共通基礎科目と名称が変更になった(工の字が消えた)。今回のアンケートの集計は、このうちの前期分であるため、微分積分Ⅰ、線形代数Ⅰ、微分積分Ⅲ、線形代数Ⅲ、解析入門Ⅰ、離散数学入門、基礎微分積分Ⅱ、基礎線形代数Ⅱ、教養基礎物理Ⅰ、初等物理Ⅰ、専門基礎物理Ⅰ、物理学概説Ⅰ、物理通論Ⅰ、化学概説Ⅰ、一般化学Ⅰ、一般生物学Ⅰ、生物学概説ⅠA、工学系電磁気学、工学系電

気回路、電気数学、材料の力学第二B、工業の力学B、機械の力学Bが、アンケートの対象になっている。これら理系共通基礎科目は、数理学関係、物理学関係、化学関係、生命科学関係、電気電子工学関係、機械工学関係の6分野から、全学部学生を対象に、一般教養の自然科学系の授業として開講されている。

【理系共通基礎科目独自の質問の選定と評価結果】

科目群独自の質問として、受講者数、授業環境、授業テーマに関する以下の3項目を選定し、4,811人の

受講者のうち、3,260人から回答がよせられた（回収率 67.8%）。

問 8 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？

問 9 快適な環境下でこの授業を受けることができた。

問 10 この授業テーマは自分の関心にあっていた。

問 8 の受講者数については、ちょうどよかったという回答が 67.5% と最も多く、やや多かったと多かったが 29.8% となっていた。問 9 の授業環境については、快適あるいはとくに問題がないと感じた学生が 75.5% と多かったが、およそ 4 人に 1 人が快適とはいえないと回答している。問 10 の授業テーマに関しては、およそ 5 人に 1 人が自分の関心には合わなかったようだ。

【共通の質問項目の評価結果】

共通の質問項目のうち、自由記述でない部分は以下のようになっており、3,260人から回答がよせられた。

問 1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問 2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問 3 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか。

問 4 この授業で修得・向上できた知識や能力を選択して下さい。

問 1 のシラバスについては、15.7% の学生がその内容があまり役に立たなかったようだ。問 2 の理解度については、およそ 4 人に 1 人がよく理解できたとは言えないと回答している。問 3 の学習時間については、一週間に 30 分程度がもっとも多く、次いで 1 時間程度となっている。4 人に 1 人はまったく授業時間外に学習しなかったようだ（ほぼ 0 時間）。問 4 の修得技能については、専門的な知識や技術、あるいは理論的思考力が多くなっているが、これは理系の授業としての特徴と言える。

【集計結果の経年変化に関する所見】

本年より質問項目が大きく変更されたため、昨年までの結果と比較できる項目が少なくなってしまった。理系共通基礎科目では、独自質問である問 9 と問 10 についてのみ 2008 年からの比較を行うことができる（いずれも前期）。問 9 の授業環境については、平均値

が 2008 年に 3.15、2009 年に 3.24、2010 年に 2.99、2011 年に 3.07、2012 年に 3.17、そして今回が 3.22 と、毎年ほぼ同じ値となっている。問 10 の授業テーマについては、平均値が 2008 年に 3.15、2009 年に 3.18、2010 年に 3.17、2011 年に 3.24、2012 年に 3.24、そして今回が 3.32 と、わずかではあるが増加傾向にあり、学生の関心をひく授業が行われるようになってきたのではないかと考えられる。

【今後の改善に向けた課題】

授業評価から授業改善のためのアンケートに切り替わった本年度より、自由に記述できる問 5 から問 7 が、教員と学生との橋渡しとして大きな意義をもつようになった。問 5 では、授業の良かった点（とくに教員の工夫など）が指摘できるようになり、問 6 では、逆に改善点を指摘し、具体的な改善策を提案することもできるようになっている。問 7 ではさらに広く意見を記述することができ、大学全体のカリキュラムや教室などの設備に対する要望も書き込める。これらの欄を建設的な意見で埋めることによって、学生から教員へ、それを受けて教員の授業改善へと結びつくことを期待したい。学生は、ぜひこの欄を白紙で提出することなく、活用して欲しい。

理系共通基礎科目は、高校生のときにそうした科目をあまり学習しなかった学生からは敬遠されがちであろう。しかし、教員は、そのことを充分認識した上で、だれにも興味を持ってもらえるように工夫を凝らして授業を行っているはずである。少なくとも意識はそうである。それでも至らない場合があるかも知れない。そう思ったら、問 5 から問 7 へ書き込みをして欲しい。それらは、確実に教員に伝わるしくみになっており、それによって授業は改善されていくものである。

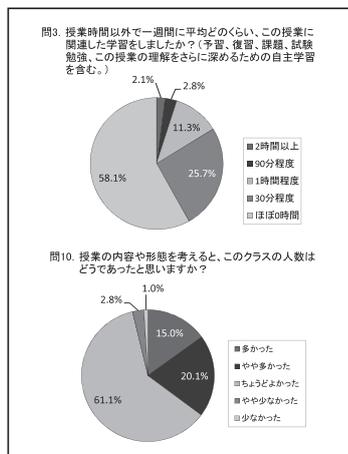
教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて

教養・基盤科目部会長
都市環境学部都市基盤環境コース准教授
小田 義也

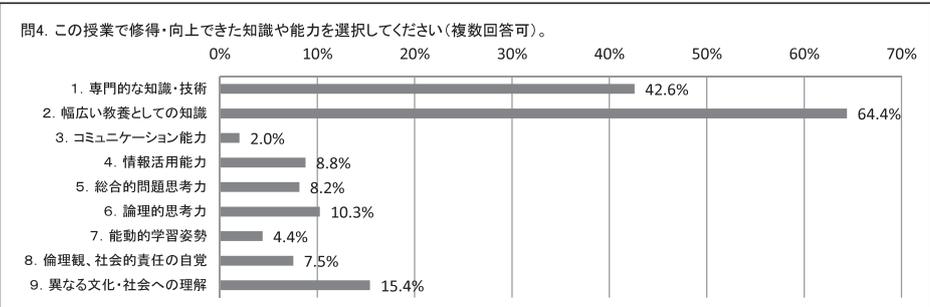
〈実施期間〉 平成25年7月9日(火)～平成25年7月22日(月)
 〈履修登録者数〉 13,954人 〈回答者数〉 6,445人 〈回収率〉 46.2%
 〈授業科目数〉 96クラス 〈実施科目数〉 80クラス 〈実施率〉 83.3%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.65	1.01	21.0%	37.4%	30.4%	7.5%		3.7%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.52	1.01	14.1%	44.4%	25.3%	12.2%		4.0%
問8 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？	2.66	0.77	4.7%	1.8%	59.3%	25.5%	8.5%	
問9 この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？	3.80	0.97	23.9%	43.9%	23.2%	5.9%		3.1%

データ数=6,445



■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまり思わない ■1.そう思わない
(問8のみ)
 ■5.易しかった ■4.やや易しかった ■3.ちょうどよかった ■2.やや難しかった ■1.難しかった



【はじめに】

今年度より全学共通科目の再体系化が行われ、「基礎科目群」、「教養科目群」そして「基盤科目群」に分類されました。このうち教養科目群と基盤科目群が旧都市教養プログラムに対応しています。教養科目群は、各テーマにおける知識を身に付け、理解を深めるとともに、社会人として必要な幅広い教養を身に付け、総合的な思考力や問題解決能力を育成することを目的とした科目。そして、基盤科目群は、各領域において学問形成に不可欠な基礎的・導入的な知識及び能力等を

修得することにより、専門分野の学習に備えることを目的とした科目。または、自らの専門とは異なる分野・領域についての知識やものの考え方を学び多角的な視野をもつことを目的とした科目、として位置づけられています。ここでは、教養・基盤科目群に対する2013年度前期に実施された授業改善アンケートの結果について、その概要を報告します。

【アンケート内容】

教養・基盤科目群では、共通の質問(7問)に加え、

科目群独自の質問として、次の3問を質問しました（括弧内は回答の選択肢）。

- ・授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？（1. 難しかった、2. やや難しかった、3. ちょうどよかった、4. やや易しかった、5. 易しかった）
- ・この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？（1. そう思わない、2. あまりそう思わない、3. どちらでもない、4. ややそう思う、5. そう思う）
- ・授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？（1. 少なかった、2. やや少なかった、3. ちょうどよかった、4. やや多かった、5. 多かった）

【アンケート結果と経年変化】

アンケートは2013年前期に開講された96クラス中80クラスで実施され、履修登録者数13,954人に対して6,445人から回答を得ました（回収率46.2%）。

まず、シラバスに関する質問（共通の質問1）について見ると、シラバスが授業選択、学習に有用であったか、という質問に対して回答平均が3.65（5が最高評価）と過去最高の評価を得ています。この間に対する評価は2008年前期（3.23）から僅かずつではありますが向上しています。しかし、一方で、いまだ41.6%の学生が「3. どちらでもない」、「2. あまり思わない」そして「1. そう思わない」を選択しており改善の余地があるといえます。

次に、難易度に関する質問（独自の質問8）では、59.3%が「ちょうどよかった」と回答しています。また「やや易しかった」と「やや難しかった」はそれぞれ4.7%、25.5%であり、それらを加えると89.5%であり、全体としては概ね適切な難易度だったと判断できます。ところが、授業を理解できたか？という質問（共通の質問2）を見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した学生は58.5%であり、難易度が「ちょうどよかった」から「易しかった」と回答した学生（65.8%）を下回っています。このギャップをそのまま受け取れば、難易度がちょうどよい、または易しいと感じていながら、授業を理解できなかった学生が1割弱いたこととなります。

共通の質問4では、授業で修得・向上できた知識や能力を質問しています。その結果、「幅広い教養としての知識」（64.4%）そして「専門的な知識・技術」（42.6%）がそれぞれ第1位、2位となり、教養・基盤科目群が適切な科目を提供しているといえます。また、授業により視野が広がったと思うか？という質問（独自の質問9）では、67.8%の学生が「そう思う」または、「ややそう思う」と回答しています。回答平均は3.8で例年と同程度の値でした。

最後に受講人数についての質問（独自の質問10）は61.1%の学生が「ちょうどよかった」と回答しています。「やや少なかった」と「やや多かった」を加えると96.2%となり、受講人数については概ね問題はなさそうです。

【今後の課題とまとめ】

シラバスの有用性について4割強の学生が疑問を持っている一方で、学生による自由記述を見る限り、シラバスの内容に対する改善意見はそれほど多くありませんでした。シラバスの内容だけでなく、同時にガイダンスなどで学生（特に教養・基盤科目群を受講する新生）にシラバスの活用方法を丁寧に説明することも必要なのかもしれません。

難易度と理解度とのギャップについては、そのギャップが有意なものであるか今回のアンケート結果だけではわかりませんが、授業時間以外の学習時間（共通の質問3）が週30分以下の学生が83.8%であることを考慮すると、学習時間の不足が理解度を下げている原因のひとつかもしれません。授業時間外学習の不足については以前から課題としてあげられているものであり、改善が望まれます。

全学共通科目の再体系化にともない、都市教養プログラムで存在していた「テーマ」や「系」による履修の縛りはなくなり、履修科目の選択は学生の自主性にゆだねられています。アンケート結果とおりに学生が自主的に幅広く様々な分野の科目を履修したのであれば理想的ですが、学生からは、つい自分の専門分野に近い（学習するうえで比較的負担が軽い）科目を選択してしまう、という本音も聞こえてきます。今回のアンケート結果では再体系化による特段の変化は見られませんでした。今後の変化を見守りたいと思います。